

研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2006～2010  
課題番号：18320011  
研究課題名（和文） 西洋中世に関する「美」の概念——新プラトン主義の受容と変容の史的  
解明  
研究課題名（英文） The concept of beauty in the history of western medieval philosophy  
- Neoplatonic tradition and its transformations  
研究代表者 樋笠 勝士（HIKASA KATSUSHI）  
上智大学・文学部・教授  
研究者番号：10208738

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、倫理学

キーワード：美の哲学、新プラトン主義、中世哲学、形而上学、美学芸術、教父  
哲学、神秘主義、西洋中世美術

#### 1. 研究計画の概要

新プラトン主義の美の思想がどのように中世キリスト教思想に伝播し変容していったのかについて、その史的展開を、中世の形而上学的美学の研究・教父とスコラ哲学の歴史研究・中世の芸術研究のその三局面において研究する。

#### 2. 研究の進捗状況

平成 18 年度はプロティノス美学研究を教父思想研究を出発点とし、学会等にて成果を発表した。特に重要なのは、東方キリスト教への新プラトン主義の研究が進んだ点である。これは、のちのビザンチン思想や神秘主義思想に繋がる研究であり。大きな足がかりをつくったと言えるものである。間接的ではあるが、ロマネスク美術様式と中世美学思想との接点をつくる研究にも成果があった。また平成 19 年度は三班に分かれた研究として、プロティノス美学研究、光の美学研究、中世末期の神秘思想とを分担し、各班に分かれて研究の促進に努め、一定の成果をあげた。この中では、プロティノス美学研究という点で研究は大きく進んだと言える。その他、翻訳を中心にしたクザーヌス研究、新プラトン主義との関係が問題にされるオリゲネス研究など、キリスト教思想の歴史研究も進んだといえる。中世美学思想の歴史研究の基礎的な部分はほぼおさえた研究状況である。さらに、平成 20 年度は研究代表者を中心にして新プラトン主義研究とアウグスティヌス美学研究を進めた。とくに、具体的な「音楽」を通

じた美学思想の研究により、中世の宇宙論や数論の文脈の中での「美」の史的概念をとらえる基盤を築いたとすることができる。これに加えて、またエックハルト研究でも進展があり、歴史研究としての「中世美学」の構築のための大きな進展をとげたと言える。

#### 3. 現在までの達成度

平成 18 年度の計画書に沿って、着実に研究は進展している。若干、研究分担者自身の研究目的に沿った成果もあり、当科研費の研究目的に符合しないようにみえる成果もあるが、これは問題にはならない。もとより、当研究課題は学際的な色彩を帯びた総合的な研究であり、各自の研究は「美」の概念に関する史的解釈の多様性に寄与するからである。この中で、達成度は下記の如くである。

- (1) 当初の計画以上に進展している  
プロティノス美学研究と東西の教父哲学の美学研究
- (2) おおむね順調に進展している  
分担者の個別研究
- (3) やや遅れている  
「光の美学」研究
- (4) 遅れているなし

#### 4. 今後の研究の推進方策

計画 4 年目となり、研究全体をまとめて発表計画をする時期に来ていると考え、既に出版物作成のための計画を立てている。現在、全体のテーマと人選と各課題を検討中である。現在の予定では出版物は科研費の課題を反映させ『西洋中世における「美」の哲学』（仮

とする予定である。

5. 代表的な研究成果  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6件)

- ① Hikasa Katsushi, *Augustine on the Aesthetics of Ambivalence*, *Aesthetics*, 13, 23-32, 2009, 査読有
- ② 樋笠 勝士, 「プロティノスにおけるパンカリアの思想——「舞台としての世界」概念の風景画——」、『上智大学哲学科紀要』、34、1-30、2008、査読無
- ③ 村井 則夫, 「音楽のエクフラシス」、『接続』、8、146-182、2008、査読有
- ④ 児島 由枝, 「カノッサの屈辱とモデナ大聖堂——「聖ゲミニウス移葬記」を読む」、『歴史家の散歩道』(上智大学文学部史学科編)、301-320、2008、査読無
- ⑤ 荻野 弘之, 「西洋思想における老いの諸相——老いの歴史を語ること」、『倫理学年報』、57、7-18、2008、査読無
- ⑥ 樋笠 勝士, 「パンカリアの概念とその射程——「東方キリスト教の美学」の始点として」、『エイコーン』、33、51-68、2006、査読有

[学会発表] (計 4件)

- ① 村井 則夫, 「図像学の哲学」、メディア研究会、2009年1月5日、山形大学
- ② 長町 裕司, 「マイスター・エックハルトの根本テーゼ„Esse est Deus“——その、聖書的かつ形而上学的基礎の開明へ向けての準備考察——」、中世哲学会、2008年11月16日、明治学院大学
- ③ 樋笠 勝士, 「アウグスティヌスにおける音楽の概念——『音楽論を通じて』」、第125回教父研究会、2008年10月18日、上智大学
- ④ O'Leary, Joseph, *Divine Simplicity and the Trinitarian Names*, 11<sup>th</sup> Gregory of Nyssa Conference, 2008年9月18日、Tübingen

[図書] (計 2件)

- ① 荻野 弘之, 「キリストの正戦論——アウグスティヌスの聖書解釈と自然法 (山内進編『「正しい戦争」という思想』所収)、2006年、34 (269)
- ② Kojima Yoshie, *Storia di una cattedrale: il Duomo di San Donnino a Fidenza: Il cantiere medievale, le trasformazioni, i restauri*, Pisa, Edizioni della Normale, 2006, 286

[産業財産権]  
○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計 0件)

[その他]